

吉村知哲，田村和夫（監修）

がん薬物療法副作用管理マニュアル 第3版

鈴木昭夫

岐阜大病院薬剤部長

がん薬物療法においては副作用が高頻度に発現し、重篤な場合には患者の生活の質（QOL：quality of life）を低下させるだけでなく、治療の中断や中止につながります。したがって、副作用対策は患者 QOL の改善のみならず、治療効果を高めるためにも薬剤師が実施し得る重要な業務と考えます。さらに、令和 6 年度診療報酬改定では、「がん薬物療法体制充実加算」が新設され、がん薬物療法の副作用管理における薬剤師の役割がますます求められています。

一方で、抗がん薬は従来の殺細胞性抗がん薬以外に分子標的治療薬や免疫チェックポイント阻害薬が次々に上市され、レジメンの数は膨大になっています。抗がん薬の種類やその作用機序により副作用のプロファイルはまったく異なり、さらに、がんの進展に伴うさまざまな有害事象により、日々の副作用管理に苦慮されている先生は多いのではないのでしょうか。本書はそんな先生方の悩みを解決してくれる一冊になると確信しています。

はじめに、本書が単に抗がん薬の

副作用対策をまとめたものでないことを強調します。本書の構成は総論と各論に大別されますが、総論では抗がん薬の副作用管理に必要な基本的な知識としながらも、問診・面接や身体診察を通じた患者の診かたや、有害事象と副作用の違いや因果関係の考え方、情報の収集・活用方法など幅広い内容が経験豊富な執筆者によりまとめられています。

各論では各副作用について原因、評価方法およびその対策が明快かつ簡潔にまとめられています。各副作用の冒頭には“POINT”として重要な点がまとめられ、臨床でよく遭遇する症例を提示するとともに“Clinical Pitfalls & Pearls”を設けることにより、容易に実践へ活用できるような工夫がされています。さらに、抗がん薬以外で考慮すべき原因やその症例も提示されています。副作用は除外診断といわれており、併存疾患や病態の進行に伴いさまざまな有害事象を合併するがん患者では、本情報は抗がん薬の減量や中止などを決める上でも極めて有益です。本書を総論から各論へと通読するこ

とにより、「総合的に患者を診る力」が養われ、複雑化するがん薬物療法の副作用を適切に管理できるようになります。

本書を活用することにより、若手薬剤師は自信を持って科学的根拠に基づいた処方提案が可能になるでしょう。本書をポケットに入れておくことにより、経験豊富な薬剤師にとっても心強い相棒となるでしょう。もちろん、本書は最新のエビデンスに基づいて執筆された専門書であり、非常に読みやすくまとめられているため、薬剤師のみならず、がん薬物療法にかかわる全ての医療スタッフに自信を持ってお薦めします。したがって、一人でも多くの方が本書を手にし、有効かつ安全ながん薬物療法の実践に活用いただくことを期待します。

●B6 変型/頁 416/2024 年 3 月

定価：4,400 円

（本体 4,000 円＋税 10%）

[ISBN978-4-260-05367-9]

医学書院 刊